

1995年
10月30日

第6号

発行所／奈良市山陵町1500 奈良大学社会学部（矢守研究室）
 日本グループ・ダイナミクス学会 TEL/FAX 0742-43-6374
 発行人／杉万俊夫 編集担当／大坊郁夫

今年の学会大会も近づいてきました。申し込み件数も多く、活発な議論が展開されることでしょう。香港のアジア社会心理学会（AASP）の旗揚げでも諸国の研究者の熱意あふれる意気を感じられました。国内外の他の学会との活発な連携が考えられていい時期なのでしょう。常任理事の山口勸先生にAASPについての記事を書いていただきました。（坊）

●● 第43回大会のご案内 ●●

第43回大会準備委員長 中村陽吉（学習院大学）

暑かった夏も過ぎて、さすがに10月に入ってめっきり秋らしくなってきましたが、会員の皆様ご健勝のことと存じます。

予てご案内いたしておりましたように、本学会の43回大会を学習院大学で11月25、26の両日開催すべく準備をすすめていただいております。

9月・10月には他の学会の大会が多く組まれておりますので、われわれの大会への参会者の人数などに影響がりはしないかと案じておりましたが、皆様のご協力によりまして、研究発表の申し込みが約120件、大会参加予約の会員数が200人ほどに達し、盛会になることと嬉しく思っております。

シンポジウムも「ソーシャル・ネットワークの変革と形成」ということで、九州大学名誉教授狩野素朗氏の司会のもとに、神戸大学の渥美公秀、九州大学の古川久敬、名古屋大学野広瀬幸雄、帝京大学の宮田加久子の4氏に発表していただきことになりました。

また、招待講演として、第1日の午後にはレオン・マン教授による研究チームにおけるリーダーシップについて、第2日の午後には河竹登志夫博士による演劇にみられる集団過程についてのお話を企画しています。

なお、使用できる教室の関係で、第2日の午前のみ別棟（ショート・スピーチ全部）に会場を移しますので、ご了承ください。また、周辺の食堂などが日曜は開店しないところが多いので、総会（昼食付き）は第2日の昼に置くことにいたしました。

学習院大学出身の少社会員や会員の大学院生とが強力に協力して準備を進めてくれましたので、すべての原稿の割り付けを終え、印刷に取りかかるところにこぎ着けましたから、（株）JRIを通じて10月末か11月初頭にはプログラムや論文集（予約の方）をお手もとに届けることができると思います。

大会が無事に終了するまで一同頑張りますので、よろしくご援助のほどお願いします。小さな大学で不慣れな運営をいたしておりますので、なにかとご不満の点も生じるかと思いますがご容赦願います。当日お目にかかれるのを楽しみにしております。

◆◆ アジア社会心理学会設立される ◆◆

常任理事 山口 勸（東京大学）

アジア社会心理学会の設立大会が、香港中文大学において、6月21日から23日の3日間にわたって開かれました。12ヶ国から100名以上の研究者や大学院生が参加し、大変質の高い研究発表と活発な討論が行われ、大盛況でした。また、夜には、大会主催の北京ダックの夕食会やその後の懇親会（明け方まで続いたそうです）で、文字どおり昼夜をわかつた国際交流が行われました。

当学会からも、杉万会長以下、黒川、大坊、山口の各常任理事、大淵、北山、浦、渥美の各理事が参加しました。そして、アジア心理学会の準備委員会のメンバーと将来の提携関係の推進に向けて、会合を持ちました。以下、この新しい学会および将来の当学会との協力関係の可能性について、会員の皆さんにご報告したいと思います。

これまでもしばしば学会で反省を含めて議論されてきたことですが、社会心理学の分野では、欧米とくにアメリカでの研究が質量ともに圧倒的で、日本の研究はその後追いにすぎないのではないかと問題があります。しかし、これは日本に固有の問題ではなく、アジア諸国の社会心理学者の間でも同様の議論がなされてきました。欧米とは文化的な背景の異なるアジア諸国で、アメリカで作られ

た理論や実証研究がそのままあはまると考えるのは、無理があります。また、アジアでもそれぞれの国の間に文化的な差異があるのも当然のことです。したがって、欧米と異なってアジアではどのような社会心理学が可能なのか、またアジアの中でも何が共通で何が異なっているのか、そしてこうした差異がなぜ生じてきたのかなどについて、議論する共通の場所が必要でしょう。ヨーロッパでもアメリカとは異なった社会心理学を発展させてきたのは皆さんもよくご存じの通りですし、アジアでもまたアメリカやヨーロッパとは「一味」異なった社会心理学が可能になるのではないのでしょうか。

このような趣旨でアジア社会心理学会は設立されたわけですが、初代の会長には韓国中央大学の Sang-Chin Choi、次期会長には、香港中文大学の Kwok Leung が選ばれました。日本からも、北山と山口が学会運営に参加することになりました。なお、次期大会は2年後の1997年を予定しています。

アジア社会心理学会との提携にむけて、杉万会長、黒川、大坊、山口常任理事、および渥美理事は、アジア社会心理学会の準備委員会のメンバーと、新しい雑誌の創刊などについて、協議しました。具体的には、アジア社会心理学会と共同で、Asian Journal of Social Psychology を発行することなどを話し合いました。常任理事会では、社会心理学でも国際化が急務と考え、このような提携を積極的に進めたいと考えています。ただし、会費の値上げなどの負担を会員にかけることなく、当学会とアジア社会心理学会との両方がメリットを享受できるような形での提携にする予定です。今年の大会において、より具体的な提案が諮られる予定です。どうぞみなさんのご支援をお願いいたします。

なお、AASPの会則および総会議事録が必要な方は、グルダイ事務局までご連絡下さい。

◆◆ 英文誌、アジア社会心理学会との共同編集に ◆◆

会長 杉万俊夫 (京都大学)

常任理事会では、昨年度総会にて承認されました活動方針に基づき、英文誌のあり方についても検討を重ねてきました。とりわけ、投稿論文数が少ないこと、また、英文での本格的editingが難しいこと、したがって、このままではジャーナルの質的レベルアップが困難であることを昨年来、常任理事会では、非公式ながら、AASPの中心メンバーと若干の意見交換を行なってきましたが、去る6月21-23日に香港で開催された第1回AASP会議の折りに、私ほか常任理事3名とAASP中心メンバーとの間で、英文誌の共同編集についてintensiveな意見交換をすることが、X政年度からの英文誌編集に関する常任理事会案

(1) 現在和文誌 (No. 1, No. 2) に続くNo. 3として刊行している英文誌を、和文誌から独立させ、"Asian Journal of Social Psychology"というタイトルで年2冊刊行する。(和文誌「実社心研」は、現行どおり、年2冊刊行する。)

(2) 編集は、グルダイ学会とAASPの共同編集体制とする。したがって、編集委員会の最高責任者 (senior editor) は、グルダイ学会会長とAASP会長の連名となる。グルダイ学会の編集委員 (= 理事 + α) は、全員、編集委員となる。

(3) 出版経費は、グルダイ学会がNo. 1を、AASPがNo. 2を負担する。

以上により、グルダイ会員には、現行の会費のままで、年2冊の英文誌が配布されることとなります。また、論文の投稿については、まず、母国語で書いた論文で審査を受け、acceptされた後に英訳して掲載するという方法もとれるよう検討を進めています。その場合も、英訳は著によって行なわれることとなりますが、英文を推敲する人物については、AASPのネットワークにより、適当な人を紹介することが可能となります。

▲▲ 論文審査3ヶ月を実現 ▲▲

昨年より、「実社心研」編集委員会では、新しい審査方針と審査手続きを導入するとともに、投稿から最初の審査結果通知までを3ヶ月で完了するという目標を立て、審査のスピードアップに努めてきました。その結果、現在の編集委員会が発足してから受稿し、第1回の審査結果通知を完了した13本の投稿論文について、投稿から最初の審査結果通知までの平均日数3ヶ月と2日を達成、目標をほぼ実現しました。

なお、新しい審査方針として、「欠点を指摘してrejectするのではなく、小さくてもよいからcontributionがあれば、それがクローズアップされるよう修正して掲載する」という方針のもとに審査を行なっています。また、審査手続きとしては、各投稿論文に主査 (原則として、編委員) を決め、その主査が2名の副査に審査を依頼、主査が、自らの査読結果と副査の査読結果を総合して、その総合コメントを著者にフィードバックするという審査手続きをとっています。このように、主査の判断のウエートが大きくなったことをカウンターバランスさせるために主査の総合コメントに納得できない場合には、著者が、直接、編集委員長に異議申し立てをできるようにしています。明確、公正、スピーディーな審査を通じて、国内研究を醸成したいというのが編集委員会の願いです。

▼▼常任理事会・常任編集委員会報告▼▼

★日本グループ・ダイナミックス学会常任理事会

日 時:1995年6月10日 14:00~17:30

場 所:奈良大学社会学部2階資料室

出席者:(会長)杉万俊夫

(常任理事)大坊郁夫、黒川正流、鈴木康平、山口勤、山本真理子、矢守克也

【報告事項】

1. ニュースレターの発行

1995年5月10日発行した。今後も、事務局情報の他、会員による研究会等の情報を増やしていきたい。次号(第6号)は9月発行予定。原稿は、8月中に大坊常任理事に提出してほしい。

2. 新入会員

5月末の「持ちまわり常任委員会」で入会を認めた、以下の12名の入会を再確認した。

①矢野 里佳(広島大学大学院・生物圏科学研究科・博士課程前期)

②長谷川孝治(広島大学大学院・生物圏科学研究科・博士課程前期)

③細田 由美(九州大学大学院・教育学研究科・修士課程)

④黒川 光流(九州大学大学院・教育学研究科・修士課程)

⑤五島 昌史(広島大学大学院・生物圏科学研究科・博士課程前期)

⑥浅賀 直樹(芝浦工業大学大学院・工学研究科・修士課程)

⑦山田 祐輔(芝浦工業大学大学院・工学研究科・修士課程)

⑧湯川進太郎(筑波大学大学院・心理学研究科・博士前期課程)

⑨泊 真 児(筑波大学大学院・心理学研究科・博士前期課程)

⑩大石 千歳(筑波大学大学院・心理学研究科・博士前期課程)

⑪押川 亮子(熊本大学大学院・教育学研究科・修士課程)

⑫升田 裕之(広島大学大学院・生物圏科学研究科・博士課程前期)

3. 年次大会における発表資格について

新入会員については、極力、大会発表が可能になるよう配慮することを了承した。

【審議事項】

1. 長期会費滞納者の扱いについて

①現時点での滞納者について

学会事務センターへの事務業務移行に伴い、長期会費滞納者の扱いを明確にする必要がある旨の報告がなされた。審議の結果、1993年以前の会費を未納の会員(89人)に対しては、7月末をメ切として全員継続の意志を確認するとともに、会費納入を督促することとした。

②今後の扱いについて

2年間会費未納の場合、3年目の会費請求に際し、「本年度中に納入なき場合は退会となる」との書面を同封し、それでも納入がないときは、退会扱いとすることとした。

★「実験社会心理学研究」常任編集委員会

【報告事項】

1. 34巻3号(英文号)の刊行

予定通り、1995年3月末刊行した。

2. 「実験社会心理学研究」審査・編集状況

35巻1号は、現在、組版中。7月に刊行予定。原著10編、資料2編、文献紹介1編、書評1編を掲載予定。なお、1995年4月~6月の審査状況は下表の通り。

	投稿総数	掲載決定	審 査 中	不掲載決定
和文誌	16	0	15	1
英文誌	4	1	2	1

3 文部省よりの出版助成金

「実験社会心理学研究」に対する文部省からの平成7年度出版助成金38万円が交付決定した。

【審議事項】

1. 「特集」のテーマについて

「特集」のテーマについて、35巻2号については、当初の予定であった「データとしての会話」を「阪神大震災とグループ・ダイナミックス」に変更してはどうかとの提案があり、了承された。また、「データとしての会話」は、36巻1号に変更とすることも併せて了承された。

2. 海外での英文誌の購読申込について
当面、奈良大の事務局で対応することとした。
3. Asian Association of Social Psychologyとの連携について
「実験社会心理学研究」の英文誌の編集・発行に関わる、上記学会との連携について審議した。その結果、6月21日～23日、香港にて開催される同学会の第1回会議において必要な情報を収集し、次回常任理事会で再度審議することとした。
4. 追悼記事について
会員の追悼記事の掲載方針について、「会員の提案により、常任編集委員会の審議を経て掲載する」ことを申し合わせ事項として了承した。
5. 故島久洋氏の追悼記事について
杉万会長より提案があり、金児暁嗣理事に執筆を依頼することとした。なお、次回の常任理事会は、9月15日に開催予定。

★日本グループ・ダイナミックス学会常任理事会報告

日 時: 1995年9月15日 14:00～17:00

場 所: エルおおさか(大阪府立労働センター) 602会議室

出席者: (会長)杉万俊夫

(常任理事)大坊郁夫、黒川正流、鈴木康平、山本真理子、矢守克也

【報告事項】

1. 会費長期滞納者について
前回の常任理事会の決定に基づき、3年以上会費を未納の会員(89名)に対して、7月末をメ切として会費納入を督促した。その結果、45名は会費を納入した。納入のなかった44名については、退会扱いとし、機関誌等の発送を止めることとした。
2. 学会賞(研究奨励賞)の選考について
末永委員長ほか10名の選考委員による選考を開始した。選考内規に基づき、7編が選考対象論文としてノミネートされ、現在、第1次審査中である。なお、審査体制の変更にともない、現審査体制での受稿論文については、①(第1)著者の年齢が受稿時点で満35歳未満であること、②主査による(1回目)の評点が7段階評価の5点以上であること、をノミネートの条件とすることを了承した。
3. 諸学会連絡会議について
山本常任理事より、各学会の分担金、「さいころじすと」の刊行、今後の運営方針などについて報告された。
4. 名誉会員の推戴について
廣田君美、三隅二不二、中村陽吉、末永俊郎(敬称略、ABC順)の4名を、本年度大会において、名誉会員に推戴することを確認した。

【審議事項】

1. 新入会員について
6月末、7月末の「持ちまわり常任委員会」で承認した10名を含め、以下の12名の入会を認めた。
 - ①波多野 純 (学習院大学大学院・人文科学研究科・博士後期課程)
 - ②加藤裕美子 (関西大学大学院・社会学研究科・博士前期課程)
 - ③石田 靖彦 (名古屋大学大学院・教育学研究科・博士前期課程)
 - ④渡辺美穂子 (大阪市立大学大学院・文学研究科・博士前期課程)
 - ⑤千葉 隆弘 (筑波大学大学院・経営制作科学研究科・修士課程)
 - ⑥安藤 直樹 (名古屋大学大学院・教育学研究科・博士前期課程)
 - ⑦渡邊としえ (神戸大学大学院・文学研究科・修士課程)
 - ⑧井上かおり (京都大学大学院・人間・環境学研究科・博士前期課程)
 - ⑨岡田 圭二 (広島大学大学院・教育学研究科・博士後期課程)
 - ⑩桑野美智子 (学習院大学・人文科学研究科・修士課程)
 - ⑪井出野 尚 (早稲田大学大学院・文学研究科・修士課程)
 - ⑫小出 寧 (江戸川学園豊四季専門学校・非常勤講師)
2. ニュースレター(第6号)の編集について
大坊常任理事より、9月末をめどに編集を進めているとの報告がなされた。審議の結果、英文誌の編集、発行をめぐるアジア社会心理学会との協力体制に関する記事を中心に、本年度大会案内、学会彙報、諸研究会の紹介などの記事を掲載することが了承された。
3. 1996年度大会開催校、および日程 広島大学総合科学部での開催を念頭に、1996年10月26日(土)、27日(日)を第1候補日として、黒川常任理事が日程調整を進めることとした。
4. 電子情報通信学会について
大坊常任理事より紹介があり、今後、ヒューマン・コミュニケーション研究会の共催を前向きに検

討していくことにした。

5. 「三隅賞」(仮称)について

前常任理事会において、英文誌掲載の論文から選考することが決定されたが、英文誌の改革(後述)と連動して変更すべき点については、今後検討することとした。ただし、名称については、「三隅賞」とすることを次回理事会、および、大会において諮ることとした。

★「実験社会心理学研究」常任編集委員会報告

【報告事項】

1. 35巻1号について

9月初旬刊行した。当初の予定通り、これまでの約30%増しのページ数として、論文10編、資料2編、文献紹介1編、書評1編を掲載した。

2. 35巻2号について

特集「阪神大震災とグループ・ダイナミックス」の論文4編、および、一般論文数編を掲載予定。予算の許す限り、できるだけ多くの論文を掲載する方針も了承された。10月中旬、入稿予定。

3. 35巻3号について

特集「Social representations」(担当:Wagner, Wo(オーストリア))の論文4本(Moscovici, S. (フランス)の巻頭論文を含む)、および、一般論文数編を掲載予定。1月上旬、入稿予定。

4. 審査・編集状況について

1995年7月～9月の審査状況は下表の通り。

	投稿総数	掲載決定	審査中	不掲載決定
和文誌	24	4	20	0
英文誌	3	2	1	0

5. 審査所要日数の状況について

現編集体制において受稿した論文について、著者へのファースト・フィードバックに要した日数は平均で3カ月と2日で、目標の3カ月をほぼ達成している。しかし、一部、目標を大きく超過しているケースもあった。

【審議事項】

1. 審査手続き上の問題点について

審査作業は、所要日数が大幅に短縮され、概ねスムーズに進行している。ただし、主査の役割、主査の決定手順などに関して、改善あるいは周知徹底すべき点もあると思われるので、それらについては次回理事会においてまとめて報告・検討することとした。

2. 英文誌の編集・刊行(アジア社会心理学会との連携)について

7月10日付で、常任理事会案を理事に郵送し、8月10日をメ切にして意見を求めた。その結果、21名中17名の理事から意見が寄せられ、すべて、基本的には支持の見解であった。今後は、9月末発行のニューズレターにおいて、同案を提示し広く会員の意見を仰ぐ予定である。

◆◆ オーストラリア社会心理学の現状について ◆◆

北海道教育大学旭川校 今川民雄

筆者は、1994年11月から1995年8月まで、オーストラリアはメルボルンの LaTrobe 大学に文部省在外研究員として滞在した。以下は、その際オーストラリア社会心理学会に参加した経験と、そして、LaTrobeで筆者を受け入れる窓口となってくれた、気鋭の社会心理学者で国際的に活躍している嘉志摩佳久氏から伺った話をまとめたものである。文責はむしろ筆者にあることをお断りしておきたい。

筆者は愛知工業大学の林文俊氏とともに、1995年4月23日から26日にかけて、タスマニアのホバートで開催された第24回オーストラリア社会心理学研究会 (Annual Meeting of Australasian Social Psychologists)に参加、発表する機会を得た。この大会はオーストラリア社会心理学会(SASP)の旗揚げ大会(First Annual Conference of Society of Australasian Social Psychologists)という記念すべき大会でもあった。

大会の雰囲気は非常に友好的で和やかであり、発表の合間のコーヒ・ブレイクでも、コーヒや紅茶が用意されたホールで参加者ほとんど全員が歓談しているといった風景が見られた。午前も午後も発表の途中でコーヒ・ブレイクの時間があるのはありがたかった。発表時間は30分で、OHPを使うのが普通という印象であった。発表形式は、シンポジウム、個人発表、ポスター発表と3種類あるが、ポスター発表は非常に少なく4件のみでほとんど普及してはいない。口頭発表件数は8つのシンポジウムでのものが51件(指定討論は除く)、個人発表が30件とシンポジウムの中での発表が多かった。ただ印象としては、個人発表とシンポジウムとで大きく異なるわけではなく、発表が共通のテーマの基に行われるかどうかの違いのように思えた。ちなみに、シンポジウムのテーマと発表件数、各シンポジウムの指定討論者を羅列すると、

social influence:6, 指定討論者なし

communication & identity:4, 指定討論者: Cindy Gallois

intergroup context of social values and social dilemmas:4, 指定討論者: Margaret Foddy

health and dietary issues:12, 指定討論者: Peter Ball

adolescent social behavior:7, 指定討論者: Patrick Heaven

social identity:7, 指定討論者: Michael Hogg

stereotyping:6, 指定討論者なし

close relationships:4, 指定討論者: Garth Fletcher

であり、health and dietary issues の件数の多さが目を引く。後でも触れるが、オーストラリアの社会心理学におけるappliedを目指す傾向の一端がここに現れているといえる。また指定討論者はシンポジウムのオーガナイザーが兼ねており、現在オーストラリア社会心理学の中心的活動をに担っている研究者たちとみてよい。最後のclose relationshipsではニュージーランドのCantabury大学のG. Fletcherが主催していたことが目立った。

ここで大会から離れて、嘉志摩氏から伺った話に移りたい。彼はQueensland大学に5年、La Trobe大学に5年ということで既に10年の間オーストラリアで教育・研究に活躍している。

オーストラリアは、歴史的にはイギリスの影響が強いのは当然であるが、心理学で見ると、ヨーロッパとアメリカの影響の狭間であって、両方を伺っているといった趣があるということだ。社会心理学でもappliedな問題を目指す傾向が強いということで、いかに実生活に役立てるかという発想が根本にある。マルチ・カルチャーの国であることから、移民の適応とか、人口のコントロールといった問題への関心がある。AIDSへのsocial scienceからの取り組みは、アメリカよりも早かったくらいである。そうしたappliedなテーマへの関心の強さは、裏返せば理論的な関心の希薄さにもつながっている。オーストラリアの心理学では、いわゆる知覚、学習に代表されるような伝統的な実験心理学が影響力を持っていたため、社会心理学は研究者も少なく(1994年版Australasian Social Psychologist Directoryに登録されている社会心理学者は244名である)、その立場が認められるようになってきたのは比較的最近のことだという。

ところでオーストラリアの中で、社会心理学領域での中心的大学といえば、Queensland 大学、オーストラリア国立大学(ANU), そして、La Trobe 大学をあげることができる。Queensland大学のM. Hoggは学会のシンポジウムでもわかるようにsocial identity theoryに関心を持ち、理論を重視する立場をとっている。とはいえそれがQueensland大学の旗印というわけではない。学会のシンポジウム主催者の1人であったC. Galloisは対人的コミュニケーションに関心を持ち、言語学に造詣が深く、Human Communication Research 誌のeditorでもある。同僚のP. Nollerはclose relationship 特に夫婦や家族の対人関係に関心を寄せている。若手のD. Terryはhealth psychologyが主要関心領域でcopingについての研究をしている。

ANUはJ. C. Turnerがprofessorで中心である。P. J. Oake, S. A. Huslam, C. A. McGartyとで一派をなしているといっても過言ではない。Social identity theoryにもとづいた研究を精力的に作り出しており、オーストラリア社会心理学に新風を送り込んだと言えるだろう。理論的関心が比較的弱かったオーストラリア社会心理学に、social identity theoryを掲げたTurner一派のインパクトは強く、今後もオーストラリア社会心理学の「台風の目」的存在として、影響を与えてゆくことが予想される。

La Trobe大学にはM. Foddyがいる。彼女は今年発足したSociety of Australasian Social Psycho-

logists(SASP)の初代会長に選ばれている。彼女の主な関心はsocial dillennaやself-conceptであり、精力的に実験を進めている。K. Macraeもcooperation, competetionとの関わりでのself-conceptに強い関心を抱いており、Foddyと比較的近い領域で研究を進めている。嘉志摩は理論的な関心が強いが、特にcross-culturalなテーマについて情報処理理論などの認知心理学的立場から研究を進めている。

そのほか、Social representation thoryに関心をもち、stereotype, やPrejudiceの研究をしているAdelaide大学のM. Augostinos、やはりstereotypeの研究をしているが、環境問題、Etnic問題にも関心を持つMardoch大学のI. Walker、またfuzzy setsの研究をしており、数学に造詣が深いM. Smithsonとsocial cognition やsocial attitudeの研究をしており、政治や科学といった社会現象への関心も強いJ. M. InnesはJames Cook大学に在る。さらに、New SouthWales大学には日本でも良く知られているJ. P. Forgasがおり、最近ではemotionをめぐるテーマに関心を強めている。

最後にオーストラリア社会心理学の大御所的存在としてFlinders大学のL. MannとMelbourne大学のGraduate School of Managementに在るN. Featherにも言及しておきたい。Mannはdecision making, collective behaviorなどの領域を専門としており、一方Featherはexpectancy-value theoryに強い関心を示しているが、最近ではtall poppy attitudes を取り上げた論文を書いている。

オーストラリア社会の立場とオーストラリア心理学あるいはオーストラリア社会心理学の立場とのつながりについては、Kashima(1995)のより詳しい報告がCross-cultural Psychology Bulletin に掲載される予定なので、関心のある方は参照されたい。

なお、今川先生は、マードック大学のWalker、クイーンズランド大学のNoller、ニュー・サウス・ウェールズ大学のForgas、ニュージーランドのクンタベリー大学のFletcher、オークランド大学のVaughanに会って来られたとのことです。情報必要な方はご連絡を。

■□ アジア社会心理学会香港大会に参加して □■

東京大学大学院人文社会系研究科 日高由香子

去る六月二日から三日間、香港で第一回アジア社会心理学会が開催され、私たち東京大学のメンバーも参加した。猛暑の上に湿度80%の啓徳空港に降り立つと、香港の熱気とエネルギーが伝わってきて、私は、学会への期待に胸をふくらませワクワクしながら、会場となる香港郊外の中文大学へと向かった。

中文大学は、海に面した丘の上に建っている、広大な敷地をもつ大学である。最終日には大学スタッフによって短いバスツアーが行われ、その敷地の広さ、景色の美しさに驚かされた。学会には、アジア・環太平洋地域から、百人前後参加し、会期中は活発な意見交換や交流が行われた。今回、ほとんどの参加者は、中文大学のそばにあるスポーツ施設に宿泊して行動を共にしたため、朝から晩まで、各国の参加者と親しむことができた。

学会では、中文大学のレオン先生やボンド先生も発表なされ、アジア的社会心理学の最先端に触れることができた。著名な各国の先生方の発表のみならず、大学院生の発表も多かった。私たち東京大学の学生も、口頭発表やパネル発表をする機会に恵まれた。英語で発表しなければならないというストレスは大きかったが、それ以上に、さまざまな先生方から、予想以上の積極的な示唆や助言をいただけたことは、大変刺激的で、参加してよかったという想いを強くさせた。学生同士でも、活発な交流が行われ、研究のコメントだけでなく、共同研究や今後の連絡の約束等が会場のあちこちで聞かれた。今回の学会の魅力の一つは、研究上の助言をいろいろな方から頂戴できたことだけではなく、各国の研究者や学生との交流が積極的かつフランクに行われたことであろう。

もちろん交流は、昼間だけではなく、夜の香港の街でも続いた。ロマンチックな百万ドルの夜景から、バイタリティあふれる香港の人々まで、香港の文化につかま触れたことは、学会に参加したことと同じ位、興味深く刺激的であった。

ホスト役の中文大学の先生方、学会のお世話をしてくれたスタッフの皆さんのおかげで、終始、アットホームで活発な雰囲気の中、学会は盛り上がった。三日目夜の徹夜パーティーの後、再会を約束して、私たちの香港学会旅行は幕を閉じた。

●● 研究会紹介 ●●

◆ 名古屋社会心理学研究会 ◆

名古屋大学 山中一英・栗林克匡

名古屋社会心理学研究会(通称NSP)は、主に愛知、岐阜、三重、静岡の東海四県在住の社会心理学研究者で構成されています。現在、会員数は約50名、長田雅喜先生(名古屋大学情報文化学部)を中心として、事務局は名古屋大学教育学部内に置かれています。年間約6回(うち1回は「実験社会心理学」合評会)のペースで研究会を開催しております。毎回約25名の方々が出席され、2時間の研究発表の後、お食事会というパターンが恒例となっております。

故大橋正夫先生のご発案によって始められた研究会も、今年で13年目を迎え、これまでにのべ73人ほどの方がご発表になられています。ちなみに、今年は既に3回開催されていますが(8/31

現在)、その報告内容と話題提供者は以下になっております。

第1回:「孤独な顔:暗黙の性格理論によるアプローチ」(諸井克英氏・静岡大学)

第2回:「環境配慮行動の要請におけるメッセージの送り手と内容の適合性の影響

ーエコロジーダイアル加入へのアクションリサーチ」(杉浦淳吉氏・名古屋大学)

第3回:「社会的スキルの追求ーコミュニケーションの総合的運用」(大坊郁夫氏・北星学園大学)

この第3回目の研究会はつい先日行われました。丁度(運よく?)名古屋大学教育学部に集中講義にいらっしゃっていた北星学園大学文学部の大坊郁夫先生にご発表いただきました。札幌とは10度以上もある気温差に、OHPと扇子を駆使してのご発表となりました。この時は、東海心理学会月例会と共催ということもあり、屋外の暑さに勝るとも劣らないほどのたいへんな熱気となりました。会員は基本的に東海地区近辺の人が多いのですが、大坊郁夫先生のように地域を越えて、この会に参加していただけると、会員にとってたいへんよい刺激になります。気さくな研究会ですので、興味のある方はぜひ参加してみてください。

◆ 奈良大学「社会心理学レクチャーズ」 ◆

奈良大学社会学部では、1993年度から内外の研究者を招いて最先端の研究を院生や学部生向きに解説してもらうシリーズ講演会を開催している。1995年度は、すでに、外山みどり氏の「推論と解釈の心理学」(第1回)、遠藤由美氏の「自己とメンタルヘルス」(第2回)の講演が成功裡に行われた。

第3回は、中谷内一也氏の「悪徳商法で学ぶ社会心理学」(10月27日)、第4回は、竹村和久氏の「意思決定の心理」(11月20日)、第5回は、D. Lehman氏の「あと知恵の比較文化研究(仮題)」(12月)、第6回は、米強氏の「現代中国社会心理学事情(仮題)」(1月)の各講演が行われる。問い合わせは、奈良大学社会学部矢守または高田(0742-44-1251)まで。

◆ 日本顔学会イブニングセミナー ◆

日本顔学会では、およそ2月おきに夕刻セミナーを催しています。参加費は1000円で参加資格の制限はありません。参加申し込みは学会事務局へFAXか葉書で開催日の10日前までに申し込みください。会場は、東京大学工学部11号館1階講堂

11月27日 18:30-20:00 大坊郁夫(北星学園大学) 「顔の魅力:その心を探る」

1月18日 18:30-20:00 村澤博人(ポーラ文化研究所) 「未定」

連絡先:学会事務局 〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京工学部電子工学科原島教官室
内 TEL 03-3812-2111(内線6681) FAX 03-5689-4637

●○ 記事をお寄せください ○●

各地の研究会、合評会の記録、案内、関連諸学会・研究会の開催情報、紀要、報告書などの情報、自著の紹介、および他著の推薦など。情報を下記にお寄せください。逐次掲載していきます。

連絡先 〒004 札幌市厚別区大谷地西2丁目3-1 北星学園大学文学部

大坊 郁夫(TEL 011-891-2731内線463)

FAX 011-894-3690) E-Mail:MAH02332@niftyserve.or.jp

=====

【編集後記】* 9月末には発行と考えていたのですが、すっかり遅れてしまいました。相済みません。国際化の実践、他の学会などとの連携など、それぞれの基点をはっきりさせながら、充実した連携がなされなければと強く感じます。* 香港の街中を歩くと今更ながら溢れ出る生活力を感じます。発砲事件で人だかりのあるすぐ横の通りではなんら変わらず客の呼び込みがあり、また、一つの店舗でも時間帯で店主が替わるなど驚きました。レストランのメニュー「二人の世界」が2人分1セットとのこと、妙に関心しました。(坊)

=====

「ぐるだいニュース（第6号）」の訂正

先日発行しました「ぐるだいニュース（第6号）」2ページの記事「英文誌、アジア社会心理学会との共同編集に」に印刷ミスがありました。本年度総会における重要議題に関連する記事ですので、ここに再掲載します。

「ぐるだいニュース」編集担当 大坊郁夫

◆◆ 英文誌、アジア社会心理学会との共同編集に ◆◆

会長 杉万俊夫

常任理事会では、昨年度総会にて承認されました活動方針に基づき、英文誌のあり方についても検討を重ねてきました。とりわけ、投稿論文数が少ないこと、また、英文での本格的editingが難しいこと、したがって、このままではジャーナルの質的レベルアップが困難であることを認識しつつ、一つの具体策として、広くアジア・オセアニアの研究者と連携する可能性を模索してきました。このような経緯の中で、このたび誕生した「アジア社会心理学会（Asian Association of Social Psychology、以下AASP）」と、英文誌の共同編集体制を組んでみては、との案が浮上しました。AASPについては、このニュースレターの山口勸常任理事の記事をご覧ください。

昨年来、常任理事会では、非公式ながら、AASPの中心メンバーと若干の意見交換を行なってきましたが、去る6月21-23日に香港で開催された第1回AASP会議の折りに、私ほか常任理事3名とAASP中心メンバーとの間で、英文誌の共同編集についてintensiveな意見交換をすることができました。その意見交換、および、その前後における常任理事の討議を経て、常任理事会として、以下のような案をまとめるに至りました。この案については、7-8月に理事の方々に文書で検討をお願いし、基本的にご賛同いただくことができました。つきましては、本年の理事会・総会で正式の議題とする前に、一般会員においてもご検討いただきたくお願いします。ご意見、ご質問がありましたら、どうぞ、事務局までお寄せ下さい。

1996年度からの英文誌編集に関する常任理事会案

- (1) 現在和文誌（No. 1, No. 2）に続くNo. 3として刊行している英文誌を、和文誌から独立させ、“Asian Journal of Social Psychology”というタイトルで年2冊刊行する。（和文誌「実社心研」は、現行どおり、年2冊刊行する。）
- (2) 編集は、グルダイ学会とAASPの共同編集体制とする。したがって、編集委員会の最高責任者（senior editor）は、グルダイ学会会長とAASP会長の連名となる。グルダイ学会の編集委員（＝理事＋α）は、全員、編集委員となる。
- (3) 出版経費は、グルダイ学会がNo. 1を、AASPがNo. 2を負担する。

以上により、グルダイ会員には、現行の会費のままで、年2冊の英文誌が配布されることとなります。また、論文の投稿については、まず、母国語で書いた論文で審査を受け、acceptされた後に英訳して掲載するという方法もとれるよう検討を進めています。その場合も、英訳は著者によって行なわれることとなりますが、英文を推敲する人物については、AASPのネットワークにより、適当な人を紹介することが可能となります。